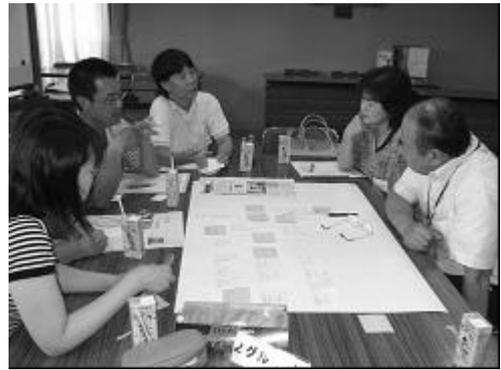


2グループ

2グループでは、「食」ってなんだろう？というところから、生産者の立場で話し合いが始まりました。（【資料2-A】参照）まず、食育の本来の意味が伝わっていないのではないかという意見が出ました。形だけではなく、「食は命を育むものである」ということを子どもへ伝えていくにはどうしたらいいだろうか。大きくなってからは、食生活はなかなか改善しにくいので、やはり若い世代にきちんとした情報を伝えていくことが一番ではないか、というところから意見をまとめていきました。



人間の命は自然からいただいた様々なものから成り立っているということをしっかり伝えなければ、どのような食育を行っても不十分になってしまいます。たてまえだけの学習ではなく、実際に体感できるような取り組みが必要であり、そのためには、篠山市で自給率100%を目指すなど、思い切った取り組みも必要ではないか、というような意見も出てきました。また、都会と交流していく中で、篠山の素晴らしさを再認識していただくこともできるのではないかと、という意見も出ています。

さらに、2回目のワークショップでは、篠山の食育として何ができるのかといったことについて考えていきました。（【資料2-B】参照）食育＝人間形成である、ということが重要であり、生産者も「命を育てている」という認識を持って作物を育てることから始めなければなりません。そして、生産者の意識とともに、消費者の意識も変えなければ安全な食というのは実現しないのではないかと。生産者と消費者の交流機会を充実させるなど、市民にももっと食について理解してもらう機会をつくってほしいという意見も出ました。

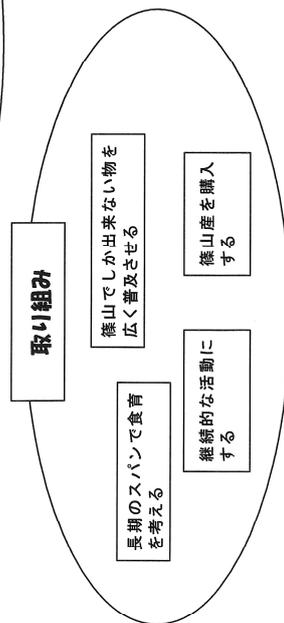
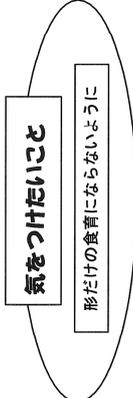
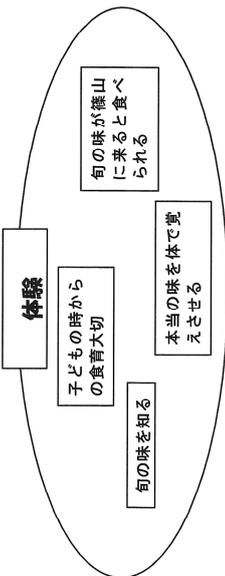
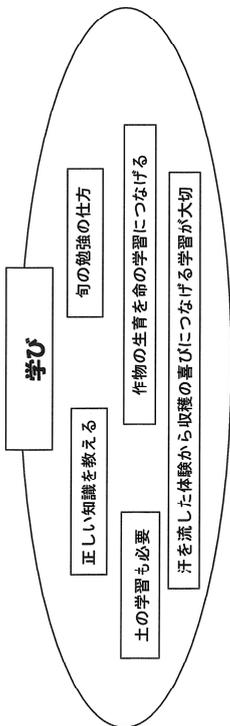


いい面、悪い面、両面の実態を把握し、情報を正しく伝えていくことが必要なのではないか。また、生産、流通、消費の間でのつなぎ役が必要であり、生産者のネットワークや、食育の活動をしている人材のリスト作成、食育について適切なアドバイスができる人材を育て、そこから活動を広げていくことが効果的なのではないかといった、人づくり、環境づくりも食育を進めていくには大切だということで意見がまとまりました。

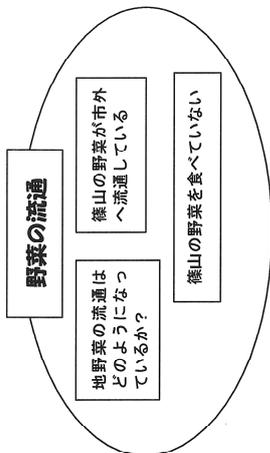
資料2-A

食(育)について考えよう!!

こんなふうになるといい!

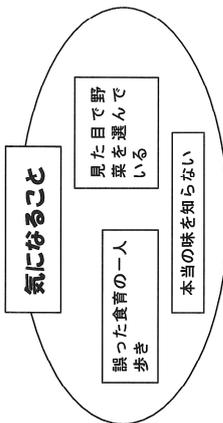


食(育)で感じていること

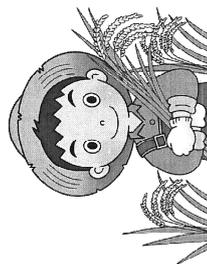


しんどい体験をすると続かない

気になること



ライフスタイルの変化



資料2-1-B

みんなのできることを考えよう!!

希望

篠山から自給率100%を目指す	1年で1人1石のお米の消費を目指す
地域に有名なレストランができること	朝ごはんを食べること
篠山の農作物で安心な食生活を送りたい	丹波特産物の開発
生産者のために、機械化銀行の創作(農機のシェアー)	丹波松茸・栗の復活
京野菜にも負けないおいしい野菜の生産	生産(穀物・野菜・畜産) 販売 消費 の連携の充実
	篠山の食を自顧できる子が増える

交流

都会と交流をする
消費者が沼山篠山へ買いに来る

体験

野外での活動を多くする
農作物の旬の時期がわかる子が増える
季節、旬の作物を知り体験(親子)
旬を知ること
取り入れた活動を
農業が好きになる

学習

若いお母さんの食の大切さについての学習の機会	安全なものへの関心知識がある
食材の色々な食べ方をみんな勉強する	子供連に自分で調理する楽しさを教える
食のアドバイザー普及	子供たちだけの料理教室を行う
メタボの対策として、バランスガイドの講習会普及	食品の表示について、きちんと知ること、学ぶこと
楽しみながら「食」について学べる	健康的な食生活を送れる
いのちを育てるといふ基本の考え方を幼い頃から体感させたい	自然の恵みに感謝できる
	正しい情報を提供する

食 = 命

人間の成長と作物の生育との比較
種から発芽 生育という成長を知る
農産物を育てる喜びを知る為に、共に作業をする
土にふれる、自然にふれる活動から、食育は始まる
体温の高い子どもを育む

伝統食

特産物のことをよく知っている
昔の話を子ども達に伝えていく
食文化の伝統
伝統食を伝えていく
食文化の伝承(高齢者の知識を活動に役立ててもらおう)
篠山の特産物は、どうしてできるか、説明できるくらいに学んでほしい